
א פ ל ו

登場人物

一馬 ハナムラカズマ
二美 フタミ（一馬の妹）
三武 サム（一馬の弟）
若松 ワカマツ（一馬の友達）
阿川 アガワ（一馬の友達）
吉野 ヨシノ（会社の上司）
長峰 ナガミネ（会社の同僚）
伊東 イトウ（会社の後輩）
間宮 マミヤ
大石 オオイシ

一馬の部屋。

テーブルと椅子があって、二美は不機嫌そうに座っている。

一馬は三武にスタンディングで腕を極められている。

一馬 痛い痛い痛い痛い。

三武は技を解かない。

一馬 痛い痛い痛い痛い。

三武は技を解かない。

一馬 痛い痛い痛い痛い。

三武は技を解かない。

三武 俺さ、グレイシー柔術習ってるから。

一馬 そうなんだ。

三武 うん。

一馬 痛い痛い痛い痛い。ねえ、やめて。

三武 兄ちゃん。

一馬 なに？

三武 俺さ、グレイシー柔術習ってるから。

一馬 それはわかったよ。

三武 だからさ、怒ってるのはわかったけど、ちゃんと冷静に話をしてくれないと、こうなるよ。

一馬 わかったよ。

三武 わかったね。

一馬 わかったよ。

三武は技を解かない。

一馬 痛い痛い痛い痛い。なんでだよ。

三武 俺さ、グレイシー柔術習ってんだよ。

一馬 それはわかったって言ってるだろ。

三武 うん。

一馬 うん、じゃなくて、わかったから技をやめてくれ。

三武 タップしないと。

一馬 は？

三武 タップ。わかる？トントンってやるやつ。

一馬 わかる。

三武 参りました。っていうサインね。試合とかだとそれをやったら、負けを認めたってこと。審判が止めたわけではなく、自ら、負けを認めたっていう、サイン、タップ。それをしてくれないと。

一馬はタップした。三武は技をといた。

二人とも椅子に座った。

三武 じゃあ話を聞こうか。

二美 私は悪くないよ。

一馬 いやいや、二美が悪いんだよ。なんで俺が攻撃されなきゃいけないんだよ。

三武 それはまだわかんないから。とりあえず何があったか、教えて。

一馬 :俺が帰ってきたら、なんか二美がいてさ。お湯を沸かしてたの。

三武 はい。やさしいね。

一馬 いや、おかしいだろ、ここ俺の家だから。勝手に入ってるのおかしいだろ。

三武 いいじゃん、兄弟なんだから、。

一馬 でもさ。

三武 たまには兄ちゃんにご飯でも作ってやろうっていう、優しさじゃんか、姉ちゃんの。そうだろ？

二美 そう。私の優しさ。

三武 ほら。それで。

一馬 それで、二美が言うわけ「かわいそうだけど、食べてあげようね」って。

三武 うん。

一馬 なんの話？って思うじゃん。

三武 うん。

一馬 え？何を茹でようとしてるの？って聞いたら。ハルサメって。

三武 ああいいじゃん。

一馬 食べるやつじゃなくて、俺の飼ってる亀のことなのね、それ。

三武 ああ。

一馬 つまりね、俺の飼ってる亀を茹でようとしてたわけ。

三武 おお。え？なんで？

二美 食べてあげたほうが、供養になるかな、って思ってさ。

三武 なるほどね。死んじゃったの？

一馬 死んでないよ。

三武 あ、死んでないんだ。

一馬 そうだよ。

三武 なに？姉ちゃんは食べたかったの？亀。

二美 そういうわけじゃないんだけど。

一馬 おかしいんだよ。仮に死んでたとしても食べないだろ。スツポンじゃないんだからさ。なんで食べようとするんだよ。

二美 美味しいかもしれないじゃん。

一馬 どういう発想だよ。おかしいんだよ。

三武 たしかにおかしいけどさ。

二美 兄ちゃん。

一馬 なんだよ。

二美 私みたいながいるから、今、日本に、納豆があるんだよ。

一馬 はあ？

二美 腐ってるよこれ、っていうのを「もしかしたら食べたら美味しいかも」って思った人がいたから、納豆があるんでしょうが。

三武 あ、そうはそうだね。

二美 そうでしょ。

三武 ナマコとかもそうだよ。あれを食べようと思った人がいたから、俺たちもナマコの美味しさを知ってるんだもんな。

二美 そうそう。

三武 兄ちゃん。感謝したほうがいいかもしれない、姉ちゃんみたいな人に。

一馬 俺は納豆もナマコも嫌いだから。

三武 知らねえよ！今のところ、姉ちゃんは悪くない。

二美 亀も美味しいかもしれないもんな。

三武 そうだよ。

一馬 そもそも死んでないから、うちのハルサメは。それを茹でようとしたんだよ？

二美 良く考えたら、死んでない方が美味しいだろうね、新鮮で。

三武 あ、そうだね。

二美は立ち上がる。

一馬 茹でようとしなくて。ねえ、俺のペットだから。

二美 してねえよ。膝を伸ばしたかっただけだよ。もし本当に新鮮な亀を食べたいと思ったら、ちゃんとどこかで買ってくるわ。

三武 死んじゃったと思ったから、茹でようとしたんだよね。

二美 そうそう。

一馬 死んじゃったと思うのもおかしいんだよ。

三武 そうなの？

一馬 だって亀だよ？

三武 それが？

一馬 今、冬眠してるの。知ってるでしょ、亀は冬になると冬眠するの。理科の授業とかでやるよね？

三武 そうね。

一馬 死んでると思うのおかしいじゃん。

三武 たしかに、姉ちゃん、おかしいかもしれない。食べたかっただけなんじゃないの？本当は。

二美 そんなことないよ。

三武 じゃあなんで。

二美 あのね、そのハルサメだっけ？亀が冬眠してるところのさ、ビジュアルがお墓だったから。

三武 ん？

二美 ビジュアルがお墓だったの。

一馬 そんなことねえよ。

二美 そんなことあるよ。水槽があつてさ、そこに土が入ってるわけ、その土の中にいるんだろうね。

一馬 そうだよ。

二美 土があつて、アイスの棒みたいのが刺さつてて、ハルサメって書いてあつたの。

一馬 そこに寝てますよって目印だろ。

二美 それで、ちよつとした花も刺してあるんだよ？

一馬 花くらい刺すだろう、花でもなかつたら、部屋に土を飾ってる頭おかしいやつに見えるだろ。

三武 姉ちゃん。

一馬 そうだろ。

三武 それはビジュアルお墓だわ。

一馬 おかしいだろ。

三武 いや、ビジュアルお墓だよそれは。

一馬 違う違う。二美の説明がお墓ありきなだけだから。実際見たら全然違うから。

三武 そうかなあ。

一馬 じゃあ見てきて。

三武 見てきてもいいけどさ。

一馬 なに？

三武 俺が、お墓じゃなかったよ、って言う可能性はゼロだよ？

一馬 なんでだよ。

三武 先入観ってものがあるからね。もうお墓だと思って見に行くから。

一馬 わかってるなら、捨てて見に行けよ、先入観。

三武 いや、捨てようとはするけどね。

一馬 捨てて、全然お墓じゃないから。

三武 ああ。わかったよ。

三武は隣の部屋に行って、すぐ戻ってくる。

三武 ビジュアルお墓だわ。

一馬 早えよ。

三武 早さ関係ないでしょ。

二美 だよね。

一馬 捨ててないじゃん先入観。

三武 捨てたって。

一馬 だって早いもん。

三武 だから早さ関係ないでしょ。

一馬 でもさあ。早いよ。

二美 早さ関係ないつつつてんでしょうが！

一馬 なんで急に怒るんだよ。

二美 早さ関係ないつつつてんのに、しつこいからだよ。

一馬 でも絶対先入観あつてだもん。お墓に見えるわけないもん。

三武 姉ちゃんは先入観なかったでしょ。

一馬 なに？

三武 姉ちゃんは先入観ない状態を見て、お墓と思ったわけだから。先入観があろうがなかろうが、ビジュアルお墓なんだよ、あれは。

一馬 それにしたって早すぎるだろ。一瞬じゃわかんないだろ。

三武 いいや、完全にお墓だよ。じっくり見たところでお墓。お線香買ってこようかしら、ってくらいお墓。

二美 だよね。

一馬 じゃあどうしたらいいんだよ。

二美 はあ？

一馬 なんだよ。

二美 普通に、お花とアイスの棒を取ればいいだけでしょ。

三武 そうだよ。

一馬 それは違うじゃん。

二美 なにが？

一馬 だから、それやっちゃったら、部屋に土を飾ってる頭おかしいやつに見えるだろ。

三武 見えねえよ。

二美 あと、誰も来ねえよ。

三武 誰が来るんだよ、この部屋に。

一馬 友達とかさ。

三武 友達を知ってるだろ、亀飼ってるって。

一馬 じゃあ、亀のこと知らない、赤の他人が来るかもしれないじゃん。

三武 赤の他人は家に来ないだろ。

一馬 普通はそうだけど、あるかもしれないじゃん。

三武 ねえよ。

二美は隣の部屋に行こうとする。

一馬 どこ行くんだよ。

二美 お墓に見えなくしてあげるよ。

一馬 余計なことするなよ。

三武 余計なことじゃないだろ、優しさだろ、姉ちゃんの。

二美 そう、私の優しさ。

三武 そして俺の優しさ。

三武も立ち上がる。

一馬 ハルサメ寝てるんだから、土をほじくったりするなよ。

三武 わかってるよ。

転換。

後ろの壁のところに

「かずまくんおたんじょうびおめでとう」

と書いてある飾りがセットされる。

一馬はそのまま座っている。

テーブルのところには、間宮と大石。ちよい無言。

間宮 なんで土飾ってんですか？

一馬 ほら来ることあったじゃん、他人。

間宮 え？

一馬 いや、なんでもないです。

間宮 で、なんで部屋の中に土飾ってんですか？

一馬 土を飾ってるわけじゃないんですよ。

間宮 でも飾ってるじゃないですか。飾ってたよね？

大石 うん。

一馬 あれは中に亀がいるんですよ。

間宮 亀？

一馬 だから土を飾ってるわけじゃないんです。

大石 へえ。

一馬 あの、すみません、どちらさまですか？

間宮 間宮です。

大石 大石です。

一馬 あ、はい。えーと、おふたりはどういう。

間宮 あ、お誕生日おめでとうございまーす。

大石 おめでとうございます。

一馬 ありがとうございます。

若松と阿川が奥の部屋からくる。

一馬 あ、ねえねえ。

若松 なに？

間宮 あ、ここどうぞ。

大石 どっか行くの？

間宮 亀見ようと思って。

大石 じゃあ私も行く。

一馬 あの、冬眠してるんで。出てこないと思うんですけど。

間宮 あ、はい。

間宮と大石は奥の部屋へ。

かわりに若松と阿川が座る。

一馬 あのさ、

若松 うん。

一馬 あれ（間宮と大石）誰？

若松 ：知らない。（阿川に）知ってる？

阿川 知らない。

一馬 あ、そう。

若松 会社の人じゃないの？

一馬 違う。

若松 えっ、怖っ。

一馬 怖っ、じゃねえよ。どうすんだよ。

若松 なにが。

一馬 やるならちゃんとしてよ。

若松 なにを？

一馬 お誕生日会。

若松 (少し笑って) お誕生日会だって。

一馬 笑ってんじゃねえよ。お前らが企画したわけじゃん。

若松 俺らっていうか、俺ね。

一馬 若松なのね。

阿川 俺は来たただけだから。つか、そもそもおかしいだろお誕生日会とか。

一馬 そうなんだよ、なんで止めてくれなかったんだよ。

阿川 俺は止めたよ。

若松 でもさ、楽しいじゃん。

阿川 こうだから。何歳だと思ってんだよ。

若松 二十三歳くらい？

阿川 そんなわけねえだろ。同い年だわ。

若松 お誕生日おめでどう！

一馬 うるせえよ。

阿川 だから、俺は若松を止めることができなかつた責任を取って、今日は参加してるわけじゃん、普通
だったら来ないよこんなの。

若松 えー？楽しいじゃん。

阿川 うん、いまのところそんなに楽しくはない。

一馬 で、さっきの人誰なんだよ。

若松 だから知らないよ。

一馬 知らない人を呼ぶんじゃないよ。

若松 一馬。

一馬 なんだよ。

若松 呼んでねえし。

一馬 は？

若松 呼んでねえし。

一馬 呼んでねえ奴がなんでいるんだよ。

若松 知らない。

阿川 お前すげえな。

若松 そう？

阿川 お前が幹事だところなるんだな。

若松 楽しいだろ。

阿川 少しだけ楽しいけど、俺、今後お前に飲み会の幹事を頼むことはないだろうね。

若松 頼んでいいのに。

阿川 うん。頼まない。

一馬 とりあえず、誰なのか聞いてきてよ。

若松 え？

一馬 あの人たち、誰なのか、聞いてきてよ。若松のせいなんだから。

若松 えー。

一馬 えー。じゃねえよ。

若松 知らない人と話すのって怖いじゃん。

一馬 知らない人が家にいることのほうが怖いんだよ。

若松 でもさあ。

阿川 どうせ、会社の人の知り合いとかなんじゃないの？

若松 そうそう。

阿川 なんか関係ある人じゃなきゃ、ここに来るわけないじゃん。

若松 だよねだよね。

阿川 お前の管理体制が杜撰なせいであんなことになってるんだから、少し黙ってような。

若松 了解。

阿川 そのうち、会社の人も来るんだろ？そっちに聞いてみればいいじゃん。

一馬 来るけど、その前にわかっておきたいじゃん。

阿川 たしかにね、このお誕生日会が終わって、何か盗まれていたとしたら、確実に犯人はあの人たちだもんな。

一馬 そうだろ？

阿川 楽しくなってきたな。

一馬 なんなんだよ。

阿川 ちゃんと様子見ておくから。

一馬 えー。聞いてきてよ。

試し読みしていただけるのはここまでです。

この続きは商品をご購入の上ご覧下さい。

ハルサメ（おためしサンプル）

2019年3月23日 初版発行

著 者 関村俊介 © 2019年

発行者 石村寛之

発行所 有限会社レトロインク

〒181-0001 東京都三鷹市井の頭4-26-7

電話 0422-24-9529
